

京都盆地の縄文時代遺跡

千葉 豊

1 はじめに

京都盆地の縄文時代遺跡は、1972年の段階ではわずか16箇所が確認されているにすぎなかったが、1989年には70箇所⁽¹⁾に増加し、⁽²⁾現在では100箇所以上の遺跡がみとめられている。近畿地方では有数の遺跡密集地域となっているといつてよい。また、これらの遺跡の分布をみると、盆地内に様に所在するわけではなく、分布には粗密があり、偏在していることがうかがわれる。本稿は、京都盆地という一地域に分布する縄文遺跡を「遺跡群」としてとらえる視点から整理検討し、縄文時代遺跡群の提起する問題に接近しようとするものである。

縄文時代における遺跡群を検討する目的のひとつは、隣接して存在する複数遺跡の関係の復原ということであろう。こうした検討は、集落そのものの構造的な検討同様、縄文人の集団領域や集団関係あるいは縄文社会の構造を明らかにするうえで、避けて通ることのできない重要な課題である。大規模開発にともなう広域にわたる悉皆調査などの進展にともない、東日本では様々な視点から検討が加えられ、多くの蓄積がなされてきているが、⁽³⁾西日本ではまず事例研究を積み重ねることが急務である。資料的制約という大きな障害があるにもかかわらず、本稿を起す動機はこうした現状認識による。なお、「遺跡群」という用語は、ある一定地域に隣接して所在する複数の遺跡を包含する概念であるが、この用語は多様な内容が含み込まれて使用されることが多い。本稿では「遺跡群」を、ある一定地域における、(1)時期の異なる遺跡の累積（通時的側面）、(2)同一年代を共有している遺跡の集合（共時的側面）、という二つの側面から整理しておきたい。

2 京都盆地縄文時代遺跡の群別

南山城の平野部も含めて、京都盆地（山城盆地）と呼ばれることもあるが、ここでは、より地形的まとまりの強い盆地北部の旧巨椋池周辺までを対象地域とする⁽⁵⁾（図29）。遺跡の分布する範囲は南北約 20 km、東西約 17 km を測る。この地域は、北および東西は山塊がさえぎり、南は宇治川や桂川、巨椋池が画して地形的に閉鎖性の強い空間を形成している。

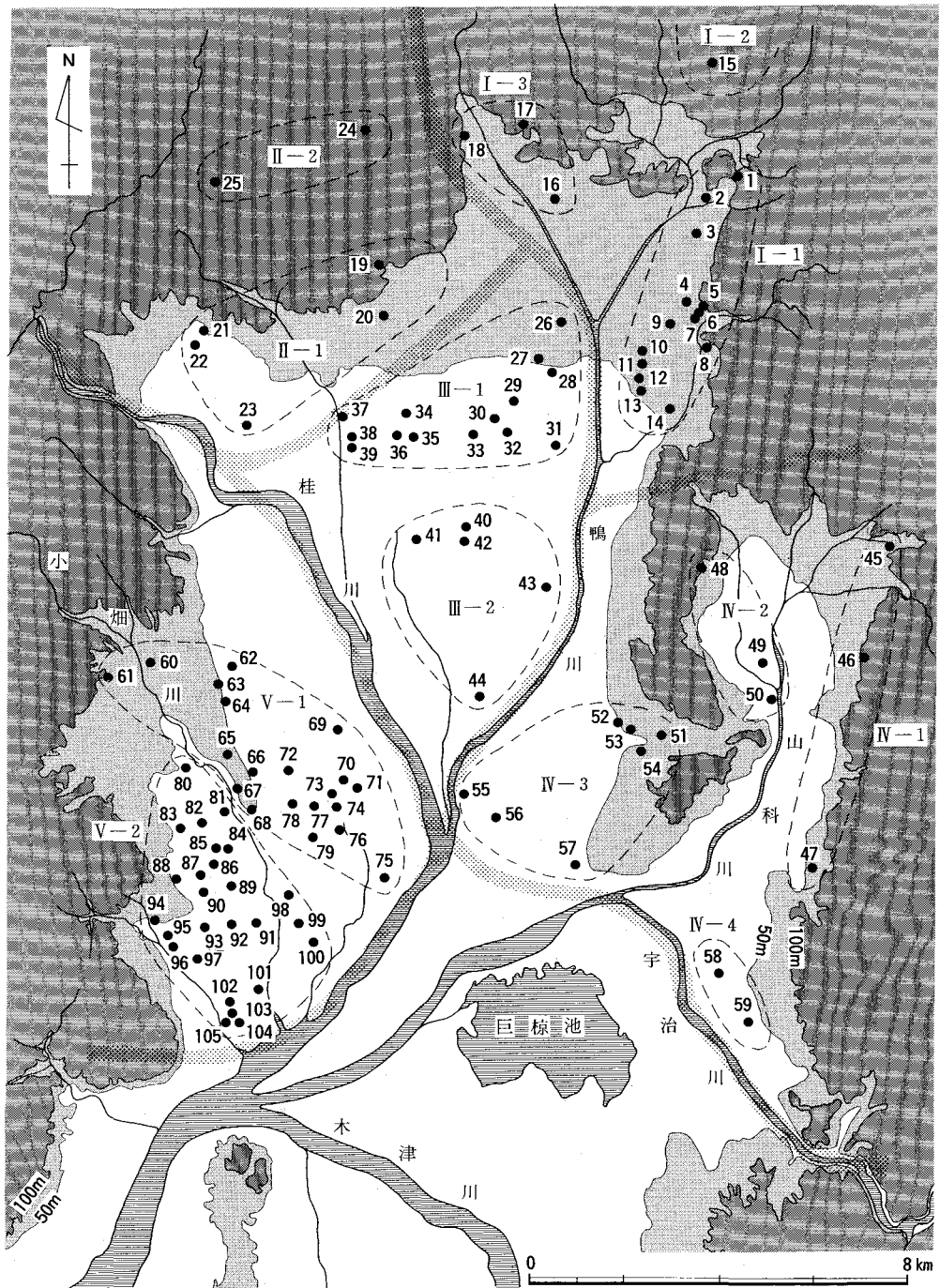


図29 京都盆地の縄文時代遺跡分布 縮尺 1/15万

遺跡群の設定は、遺跡の地理的位置や密集度、地形環境に基づいておこなった。遺跡を群としてとらえるためには、年代のものさしをできるだけ細かくし、すなわち細別された土器型式に基づき、同時期の遺跡を群としてとらえてゆく必要がある。しかしここでは、記述が煩雑になるのを避けるためと、一定地域への長期にわたる遺跡の累積がなんらかの社会的関係を反映しているとの想定より、まず、京都盆地に残された縄文時代全体の遺跡分布から、大きく5つの地域に区分し、各々の地域の中をさらに2~5の地区に細分した。この区分をもとに、通時的な視点と共時的視点から、実際のすがたをみてゆくことにした。最初に、設定した地域の特徴を概観しておく。

I 地域は、盆地北東部で18遺跡を数える。盆地の最奥部に位置する。比叡山西南麓に発達した扇状地上にとくに遺跡が密集している。比叡山西南麓の遺跡をI-1地区、岩倉の遺跡をI-2地区、上賀茂の遺跡をI-3地区とする。

II 地域は、盆地北西部で7遺跡を数える。丘陵上と段丘上に遺跡は立地する。南部の段丘上の遺跡をII-1地区、北部の丘陵上の遺跡をII-2地区とする。

III 地域は、鴨川と桂川に挟まれた盆地中央部にあたり、19遺跡を数える。北部で扇状地上に立地する遺跡をIII-1地区、南部で扇状地から氾濫原に位置する遺跡をIII-2とする。

IV 地域は、山科盆地、宇治川右岸、鴨川左岸を含む盆地東南部で、15遺跡を数える。段丘上、扇状地上から氾濫原に立地する遺跡が分布する。山科盆地東部の扇状地上に立地する遺跡をIV-1地区、山科盆地西部の丘陵、段丘、扇状地上に立地する遺跡をIV-2地区、鴨川右岸の扇状地から氾濫原にかけて立地する遺跡をIV-3地区、宇治川右岸の扇状地上に立地する遺跡をIV-4地区に細分する。

V 地域は、桂川右岸に位置する盆地西南部で48遺跡を数える。段丘、扇状地、氾濫原に立地する遺跡を含む。小畑川右岸の遺跡をV-1地区、左岸の遺跡をV-2地区とする。

3 遺跡群の時期的消長とその実態

時期別遺跡数 まず最初に、京都盆地全体としての遺跡の動向を他地域と比較しておきたい。図30は、泉拓良氏が作製した地域別の縄文遺跡の時期別比率のグラフに、京都盆地を加筆したものである。⁽⁶⁾ 京都盆地の時期別比率は、早期から前期にかけてわずかに減少し、中期以降は順次増加してゆくという線を描いている。前期以降にかんして言えば、低地部の遺跡の代表である大阪平野とその周辺の比率とよく似ていることが判明する。異なっているのは、京都盆地では早期の遺跡の比率がやや高いことで、これは盆地縁辺の丘

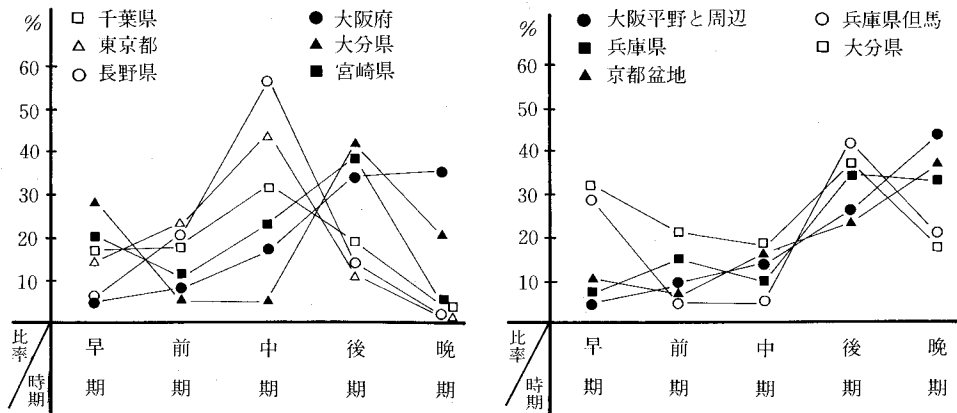


図30 各府県・各地方の遺跡数時期別比率 (注6 泉文献, 第8図に加筆)

陵状の地形が早期の遺跡を増やしている結果と考えられる。

表3は、京都盆地の時期別の遺跡数推移をさきに設定した地区別にみたものである。個々の地区の単位でみてゆくと、比較的継続的に占地されている地区 (Ⅰ-1・Ⅲ-1・Ⅳ-2・Ⅴ-1・Ⅴ-2), 前半期に主体がある地区 (Ⅱ-1), 後半期に主体のある地区 (Ⅲ-2, Ⅳ-1), 全く時期の不明な地区 (Ⅰ-2, Ⅱ-2) など、遺跡数の推移にはいくつかの傾向があることがわかる。しかし、地域単位でみると、Ⅱ地域を除けば、それぞれの地域は京都盆地全体の遺跡数推移の傾向とほぼ似た変動を示しているといえよう。とくに、Ⅳ地域とⅤ地域における前期遺跡の未発見が、大阪平野と比較して京都盆地全体における前期遺跡の比率が低い現象を惹起させていると想定できる。

型式別遺跡数 大別時期では京都盆地全体および地域別の単位で、前期以降遺跡数は順次増加する傾向にあることをみてとれた。表4は、現在までに何等かの形で公表されている資料をもとに、土器型式別に確認できる遺跡数の推移をみたものである。未報告の資料の存在や新たな発見など、今後の変動も予想されるが、およそその傾向を示しているとみてよいだろう。

遺跡数が比較的多いⅠ-1地区やⅤ-2地区そして京都盆地全体をとりあげれば、遺跡が前期から晩期に向かって一直線に増加しているわけではなさそうである。むしろそれぞれの時期のなかで、増加と減少という細かなジグザグ線を描きながら推移している、というのが実態であろう。そうした中で、早期前半の新しい段階 (押型文後半期), 中期末 (北白川C式), 後期前葉 (北白川上層式1期), 晩期末 (船橋式, 長原式) に比較的大きな増加がみられるのが注目される。しかし、こうした増加もその型式内か2, 3型式の間で再

遺跡群の時期的消長とその実態

表3 京都盆地時期別遺跡数の推移

	I-1	I-2	I-3	計	II-1	II-2	計	III-1	III-2	計	IV-1	IV-2	IV-3	IV-4	計	V-1	V-2	計	全体
草創期?	—	—	—	0	1	—	1	4	—	4	—	2	—	—	2	2	4	6	13
早期	5	—	1	6	1	—	1	1	—	1	—	1	1	1	3	2	3	5	16
前期	5	—	—	5	1	—	1	1	—	1	—	—	—	—	0	—	—	0	7
中期	7	—	1	8	—	—	0	3	1	4	1	1	—	—	2	4	6	10	24
後期	11	—	1	12	—	—	0	1	2	3	2	2	—	—	4	7	8	15	34
晩期	11	—	1	12	—	—	0	3	3	6	2	1	4	2	9	10	8	18	45

表4 京都盆地土器型式別遺跡数の推移

	I-1	I-2	I-3	計	II-1	II-2	計	III-1	III-2	計	IV-1	IV-2	IV-3	IV-4	計	V-1	V-2	計	全体
押型文(古)	—	—	—	0	—	—	0	1	—	1	—	1	—	—	1	—	—	0	2
押型文(新)	5	—	1	6	—	—	0	—	—	0	—	—	1	—	1	1	1	2	9
宮ノ下	2	—	1	3	—	—	0	—	—	0	—	—	—	—	0	—	—	0	3
条痕文	1	—	—	1	—	—	0	—	—	0	—	—	—	—	0	—	—	0	1
羽島下層II	1	—	—	1	—	—	0	—	—	0	—	—	—	—	0	—	—	0	1
北・下層I	3	—	—	3	—	—	0	—	—	0	—	—	—	—	0	—	—	0	3
北・下層II	4	—	—	4	—	—	0	—	—	0	—	—	—	—	0	—	—	0	4
北・下層III	3	—	—	3	—	—	0	—	—	0	—	—	—	—	0	—	—	0	3
大歳山	2	—	—	2	—	—	0	1	—	1	—	—	—	—	0	—	—	0	3
鷹島	2	—	—	2	—	—	0	1	—	1	—	—	—	—	0	—	1	1	4
船元I	1	—	—	1	—	—	0	1	—	1	—	—	—	—	0	—	2	2	4
船元II	1	—	—	1	—	—	0	—	—	0	—	—	—	—	0	—	1	1	2
船元III	2	—	—	2	—	—	0	—	—	0	—	—	—	—	0	1	1	2	4
船元IV	2	—	1	3	—	—	0	—	1	1	—	—	—	—	0	—	2	2	6
里木II	1	—	1	2	—	—	0	—	—	0	—	—	—	—	0	—	—	0	2
北白川C	5	—	1	6	—	—	0	1	—	1	1	1	—	—	2	3	3	6	15
中津	2	—	1	3	—	—	0	—	—	0	2	1	—	—	3	3	3	6	12
福田K2	3	—	—	3	—	—	0	—	—	0	—	1	—	—	1	1	1	2	6
広瀬土坑40	3	—	—	3	—	—	0	—	—	0	—	—	—	—	0	1	1	2	5
北・上層1	5	—	1	6	—	—	0	—	1	1	—	—	—	—	0	3	4	7	14
北・上層2	6	—	1	7	—	—	0	—	1	1	2	1	—	—	3	4	2	6	17
北・上層3	4	—	—	4	—	—	0	—	—	0	—	1	—	—	1	3	—	3	8
一乗寺K	1	—	—	1	—	—	0	—	—	0	—	1	—	—	1	1	—	1	3
元住吉山I	1	—	—	1	—	—	0	—	—	0	—	1	—	—	1	—	1	1	3
元住吉山II	1	—	—	1	—	—	0	—	—	0	—	1	—	—	1	—	—	—	2
宮滝	1	—	—	1	—	—	0	—	—	0	—	1	—	—	1	2	2	4	6
滋賀里I	—	—	—	0	—	—	0	—	—	0	—	1	—	—	1	1	1	2	3
滋賀里II	1	—	—	1	—	—	0	—	—	0	—	1	1	—	2	3	2	5	8
滋賀里III	2	—	—	2	—	—	0	—	—	0	—	1	—	—	1	5	3	8	11
滋賀里IV	2	—	—	2	—	—	0	1	—	1	—	1	—	—	1	3	—	3	7
船橋	6	—	—	6	—	—	0	2	1	3	1	1	1	1	4	2	—	2	15
長原	9	—	1	10	—	—	0	2	1	3	—	1	2	—	3	5	2	7	23

京都盆地の縄文時代遺跡

表5 京都盆地縄文時代遺跡の消長

遺 跡 名 時 期		Ⅰ - Ⅰ										Ⅰ-2	Ⅰ - 3			Ⅱ - Ⅰ			Ⅱ - 2		Ⅲ - Ⅰ						
		1 修学院離宮	2 修学院小学校内	3 一乗寺向畑町	4 北白川上終町	5 北白川廃寺下層	6 北白川小倉町	7 北白川別当町	8 銀閣寺下層	9 北白川追分町	10 京大本部構内	11 京大教養部構内	12 吉田近衛町	13 聖護院	14 岡崎	15 岩倉中在地	16 植物園北	17 上賀茂	18 西賀茂	19 衣笠氷室町	20 北野	21 広沢池	22 嵯峨釣殿町	23 蜂ヶ丘中学校内	24 沢池	25 菖蒲谷	26 同志社女子大構内
草 創 期																				●							
早 期	押型文 (古)																										
	押型文 (新)	┃		┃	┃	┃	┃						┃														
前 期	宮ノ下式	┃																									
	条 痕 文																										
	羽島下層Ⅱ式			┃																							
	北白川下層Ⅰa式						┃																				
	北白川下層Ⅰb式						┃																				
	北白川下層Ⅱa式																										
	北白川下層Ⅱb式												┃														
	北白川下層Ⅱc式													┃													
中 期	北白川下層Ⅲ式																										
	大蔵山式																										
	鷹 島 式																										
	船元Ⅰ式																										
	船元Ⅱ式																										
	船元Ⅲ式																										
後 期	船元Ⅳ式																										
	里木Ⅱ式																										
	北白川C式				▲				▲																		
	中 津 式																										
	福田K 2 式																										
	広瀬土坑40																										
	北白川上層式 1		┃		┃																						
	北白川上層式 2		┃																								
	北白川上層式 3																										
	一乗寺K式			┃																							
晩 期	元住吉山Ⅰ式																										
	元住吉山Ⅱ式																										
	宮 滝 式			┃																							
	滋賀里Ⅰ式																										
	滋賀里Ⅱ式																										
	滋賀里Ⅲa式																										
	滋賀里Ⅲb式																										
晩 期	滋賀里Ⅳ式																										
	船 橋 式		┃																								
	長 原 式			┃																							

遺跡群の時期的消長とその実態

表5 つづき

遺 跡 名 時 期		Ⅲ-1										Ⅲ-2					Ⅵ-1		Ⅳ-2		Ⅳ-3						
		27 内膳町	28 京都御苑春日町	29 高陽院下層	30 二条城町	31 高倉宮下層	32 堀川院下層	33 朱雀第7小学校内	34 西ノ京南上合町	35 西ノ京新建町	36 西ノ京桑原町	37 右京三条四坊二町	38 西院三蔵町	39 西院平町	40 坊城町	41 西七条市部町	42 鴻臚館下層	43 東九条西山王町	44 上島羽	45 芝町	46 大宅庵寺下層	47 日野谷寺町	48 旭山	49 中臣	50 勸修寺	51 馬谷	52 深草
草創期							●			●	●		●										●	●			
早期	押型文(古)							┃																┃			
	押型文(新)																										
前期	宮ノ下式																										
	条痕文																										
	羽島下層Ⅱ式																										
	北白川下層Ⅰa式																										
	北白川下層Ⅰb式																										
	北白川下層Ⅱa式																										
	北白川下層Ⅱb式																										
	北白川下層Ⅱc式																										
中期	北白川下層Ⅲ式																										
	大蔵山式						┃																				
	鷹島式		↕				┃																				
	船元Ⅰ式		↕				┃																				
	船元Ⅱ式		↕																								
	船元Ⅲ式		↕																								
後期	船元Ⅳ式		↕																								
	里木Ⅱ式		↕																								
	北白川C式		↕	┃																							
	中津式														┃												
	福田K2式																										
	広瀬土坑40																										
	北白川上層式1																										
	北白川上層式2																										
晩期	北白川上層式3																										
	一乗寺K式																										
	元住吉山Ⅰ式																										
	元住吉山Ⅱ式																										
	宮滝式																										
	滋賀里Ⅰ式																										
	滋賀里Ⅱ式																										
	滋賀里Ⅲa式																										
滋賀里Ⅲb式																											
滋賀里Ⅳ式																											
船橋式																											
長原式																											

● 有茎尖頭器 ▲ 住居跡 ▲ 土器棺墓 ▼ 配石・集石 ↔ 細別型式不明

● 有茎尖頭器 ▲ 住居跡 ▲ 土器棺墓 ▼ 配石・集石 ←→ 細別型式不明

京都盆地の縄文時代遺跡

表5 つづき

遺 跡 名 時 期		Ⅳ-3				Ⅳ-4				Ⅴ-1																	
		53 貞観寺下層	54 谷口	55 鳥羽離宮下層	56 下鳥羽	57 金森出雲	58 寺界道	59 牟上り	60 大枝	61 大原野	62 西ノ岡	63 中海道	64 物集女車塚周辺	65 西垣内	66 殿長	67 中野	68 南山	69 中久世	70 東土川西	71 東土川	72 渋谷川	73 石田	74 鶏冠井	75 久我西出町	76 鶏冠井清水	77 高田	78 森本
草 創 期									●					●													
早 期	押型文 (古)							↑	↑																		
	押型文 (新) 宮ノ下式				┃			↑	↑																		
前 期	条 痕 文																										
	羽島下層Ⅱ式																										
	北白川下層Ⅰa式																										
	北白川下層Ⅰb式																										
	北白川下層Ⅱa式																										
	北白川下層Ⅱb式																										
	北白川下層Ⅱc式																										
中 期	北白川下層Ⅲ式																										
	大蔵山式																										
	鷹 島 式																										
	船元Ⅰ式																										
	船元Ⅱ式																										
	船元Ⅲ式																										
後 期	船元Ⅳ式																										
	里木Ⅱ式																										
	北白川C式																										
	中 津 式																										
	福田K2式																										
	広瀬土坑40																										
	北白川上層式1																										
	北白川上層式2																										
	北白川上層式3																										
	一乗寺K式																										
晩 期	元住吉山Ⅰ式																										
	元住吉山Ⅱ式																										
	宮 滝 式																										
	滋賀里Ⅰ式																										
	滋賀里Ⅱ式																										
	滋賀里Ⅲa式																										
晩 期	滋賀里Ⅲb式																										
	滋賀里Ⅳ式																										
	船 橋 式																										
	長 原 式																										

遺跡群の時期的消長とその実態

表5 つづき

		V-1		V-2																									
遺 跡 名 時 期		79 中 福 知	80 石 見	81 上 里	82 井 ノ 内	83 朝 日 寺	84 今 里 北ノ町	85 今 里	86 舞 塚	87 大 塚	88 長 法 寺	89 弓 場 街 道	90 東 代	91 神 足	92 開 田	93 十 三	94 奥 海 印 寺	95 下 海 印 寺	96 伊 賀 寺	97 友 岡	98 馬 場	99 芝 本	100 雲 宮	101 南 栗 ヶ 塚	102 谷 脇	103 宮 脇	104 下 植 野 南	105 松 田	
草 創 期									●	●									●	●									
早 期	押型文 (古)		↕																							↕			
	押型文 (新)																												
宮ノ下式																													
前 期	条 痕 文																												
	羽島下層Ⅱ式																												
	北白川下層Ⅰa式																												
	北白川下層Ⅰb式																												
	北白川下層Ⅱa式																												
	北白川下層Ⅱb式																												
	北白川下層Ⅱc式																												
	北白川下層Ⅲ式																												
大蔵山式																													
中 期	鷹 島 式																												
	船元Ⅰ式																												
	船元Ⅱ式																												
	船元Ⅲ式																												
	船元Ⅳ式																												
	里木Ⅱ式																												
北白川C式																													
後 期	中 津 式																												
	福田K 2式																												
	広瀬土坑40																												
	北白川上層式1																												
	北白川上層式2																												
	北白川上層式3																												
	一乗寺K式																												
	元住吉山Ⅰ式																												
	元住吉山Ⅱ式																												
	宮 滝 式																												
晩 期	滋賀里Ⅰ式																												
	滋賀里Ⅱ式																												
	滋賀里Ⅲa式																												
	滋賀里Ⅲb式																												
	滋賀里Ⅳ式																												
	船 橋 式																												
	長 原 式																												

● 有茎尖頭器 ▲ 住居跡 ▲ 土器棺墓 ▼ 配石・集石 <—> 細別型式不明

び落ち込む。小さな変動にいくつかの大きな変動が重なりながら遺跡数が推移していることに注目しておきたい。

遺跡の実態 ここまでとくに断わずに、遺跡という用語を使ってきた。「遺跡群」の実態にふみこむためには、遺跡が示す内容を検討する必要がある。一口に「遺跡」といっても、住居や墓が発見され、多量の遺物がみつかる遺跡から、多量の遺物がみつかったも遺構が確認できない遺跡、少量の遺物のみが見つかる遺跡、後世の包含層の中から少量の遺物がみつかったり2次堆積の遺跡まで様々なすがたの遺跡を含んでいる。また土器型式からみて、長期にわたって存続したとみられる遺跡、短期あるいは断続的な占地が想定しうる遺跡があり、これらを同質のものとして扱うことはできない。

遺跡の性格による類型化（＝遺跡タイポロジー）は、遺構と遺物の組合せや遺跡の立地形態などを考慮して、6つのパターンに分類する小林達雄氏の案⁽⁷⁾などがある。このような分類案は、おもに東日本の縄文遺跡のあり方にに基づいたものである。遺構の検出等がきわめて限定され、集落形態の違いも予測しうる近畿地方の遺跡にそのまま用いることは、不可能ではないとしてもあまり現実的ではない。そこでここでは、住居や墓などの集落を構成する主要な施設や石棒や土偶など祭祀にかかわって使用されたとみられる遺物が見つかる場合あるいは多量の遺物が見つかる場合は、中核的な集落と考えた。そして、少量の遺物のみが見つかる場合は一時的な利用地ないしは集落候補地にとどめ、2次堆積の遺跡はその地域における時期的な連続性をみるさいに補助的に利用することにしたい（表6・7）。

遺跡群の消長 遺跡の実態を以上のようにとらえたうえで、時期別に遺跡の内容を検討しながら、群ごとの消長をみてみよう。なお、Ⅱ地域は実態がまったく不明であるので記述を省く。

草創期 草創期に編年される土器は、京都盆地ではまだ確認されていない。有茎尖頭器を出土した遺跡が草創期に含まれる可能性を考えて、「草創期？」として扱った。全体で13遺跡を数えるが、ほとんどが後世の堆積土などからの単独出土例であり、遺跡の状況がわかる例はない。ただし、Ⅲ-1地区で4例、Ⅳ-2地区で2例、Ⅴ-1地区2例、Ⅴ-2地区4例と集中して見つかっており、この地域を舞台に活動していた集団の存在が想定される。Ⅲ-1地区では、京都盆地最古の土器（早期前半の大川式）も見つかっており、低地部における遺跡の立地状況に今後留意する必要がある。

早期 早期前半押型文期の遺跡は盆地の縁、丘陵上に分布する傾向にある。押型文

表 6 主要な遺構のみつかった遺跡

〔住居跡〕

番号	遺跡名	地区	数量	時期	土器型式	備考
5	北白川廃寺下層	I-1	1	早期前半	黄島式直前	壁柱穴
9	北白川追分町	I-1	2	中期末	北白川C	石囲炉1, 地床炉1
4	北白川上終町	I-1	1	中期末	北白川C	石囲炉
47	日野谷寺町	IV-1	3?	中末後初	北白川C・中津	石囲炉3, プラン未確認
82	井ノ内	V-2	1	後期前葉	広瀬土坑40	地床炉
67	中野	V-1	1	晚期中葉	滋賀里III	
31	高倉宮下層	III-1	1	晚期後葉		

〔土器棺墓〕

番号	遺跡名	地域	数量	時期	土器型式	備考
9	北白川追分町	I-1	7	後期前葉	北白川上層1	正位・横位単独, 配石
49	中臣	IV-2	2	後期前葉	北白川上層2~3	正位単独
9	北白川追分町	I-1	1	晚期後葉	長原	横位単独, 壺棺か
31	高倉宮下層	III-1	1	晚期後葉	滋賀里IV	単独
49	中臣	IV-2	6	晚期後半	滋賀里III b~船橋	単独4, 合蓋1, 合口1
74	鶏冠井	V-1	1	晚期中葉	滋賀里III b	合口
98	馬場	V-2	1	晚期中葉	滋賀里III b	単独
46	大宅廃寺下層	IV-1	1	晚期後葉	船橋	横位単独
3	一乗寺向畑町	I-1	1	晚期末	長原	横位単独
85	今里	V-2	1	晚期末	長原	合蓋, 壺棺
16	植物園北	I-3	1	晚期末		合口

〔配石・集石〕

番号	遺跡名	地域	数量	時期	土器型式	備考
5	北白川廃寺下層	I-1	8	早期前半	黄島式直前	集石土坑, 住居跡
47	日野谷寺町	IV-1	2	中末後初	北白川C・中津	配石土坑, 土坑
9	北白川追分町	I-1	8	後期前葉	北白川上層1	配石, 土坑, 土器棺
95	下海印寺	V-2	1	後期前葉	広瀬土坑40	集石
9	北白川追分町	I-1	1	晚期後葉	滋賀里IV	配石土坑

前半期の遺跡は、西ノ京南上合町（34-遺跡番号以下同じ）と中臣（49）の2遺跡しかない。ともに1片程度の土器が確認されているだけであって、具体的な遺跡の状況はとらえにくい。これに対し、押型文後半期の遺跡は8遺跡に増加する。I地域とV地域を中心に集団が居住したらしい。とくにI-1地区では、北白川廃寺下層（5）で住居跡1棟と集石土坑8基が確認され、この時期の集落のすがたがとらえられた。集落は、現在は埋没しているやせ尾根上に営まれており、早期的な集落立地として注目しうる。

早期後半の宮ノ下式期では、遺跡数は減少しI地域でのみみとめられるが、少量の土器が確認できるだけである。この時期の遺跡は扇状地上に占地している。早期前半の遺跡立地の傾向とは異なっており、前期以降につながる立地形態といえる。

前期 ほとんどの時期を通じて、II-1地区でのみ遺跡がたどられる。この地域で

表 7 祭祀遺物出土遺跡

[石棒・石刀]

番号	遺 跡 名	地 域	数 量	時 期	種 類	備 考
9	北白川追分町	I-1	2	中 期 末	石 棒	頭部+基部 1, 身部 1
17	上 賀 茂	I-3	1	中 期 末	石 棒	頭 部
68	南 山	V-1	1	中 期 末	石 棒	頭部, 溶結凝灰岩製
85	今 里	V-2	1	中～後期	石 棒	
13	聖 護 院	I-1		後期前葉	石 棒	
44	上 鳥 羽	III-2	1	後期前葉	石 棒	基部, 緑色凝灰岩製
82	井 ノ 内	V-2	1	後期前葉	石 棒	
74	鶏 冠 井	V-1	1	晩期前半	石 刀	
74	鶏 冠 井	V-1	1	晩期中葉	石 棒	ホルンフェルス製
9	北白川追分町	I-1	5	晩期後葉	石 棒	緑色片岩製
31	高倉宮下層	III-1	2	晩期後葉	石 棒	片岩系石材
73	石 田	V-1	1	晩 期 末	石 刀	
63	中 海 道	V-1	1	晩 期 末	石 刀	
77	高 田	V-1	1	晩 期	石 刀	頁岩製
49	中 臣	IV-2	11	晩 期	石 刀	
14	岡 崎	I-1			石 棒	
46	大宅廃寺下層	IV-1			石 棒	

[土 偶]

番号	遺 跡 名	地 域	数 量	時 期	備 考
47	日野谷寺町	IV-1	1	中期末後期初	分銅形, 完形品
31	高倉宮下層	III-1	1	晩期後葉	脚 部
100	雲 宮	V-2	1	晩 期 末	頭 部

は、早期後半から扇状地上に遺跡が占地するようになり、前期に入って本格的な集落が北白川小倉町(6)で営まれる。前期の大部分を通じて集落は継続するが、前期末に集落の中心は一段低い扇状地末端の北白川追分町(9)に移動する。ただし遺物量からみて、前期末から中期初頭には集落の規模は縮小したようである。

盆地中央部のⅢ-1地区の高倉宮下層(31)で、前期末大歳山式が出土しているが、2次堆積による出土であり、遺跡の性格は今後の周辺調査に期待したい。

中 期 I-1地区は前期に引き続いて集落が営まれるほか、I-3地区、Ⅲ-1・2地区、IV-1・2地区、V-1・2地区でも遺跡が確認され、盆地全体に遺跡が分布するようになる。複数の集落の並存状況がみとめられる。

I-1地区では、北白川追分町(9)で集落が営まれる。中期末に繁栄を迎え、この時期には北白川上終町(4)にも集落が形成される。I地域では、このほか3地区の上賀茂(17)でも、中期中葉に遺跡が始まる。中期末に属する石棒が出土しており、中核的な集落であると考えられる。Ⅲ地域は散漫な出土状況で、集落と確実にいえる遺跡は今のところつかめ

ていない。Ⅳ地域では、Ⅰ地区の日野谷寺町(47)とⅡ地区の中臣(49)で集落が営まれるようになる。中臣は、これ以降遺物の出土量に増減などがみられるものの、晩期末まで集落が継続しており、京都盆地では今のところ唯一の長期にわたる継続型の集落であるといえよう。

Ⅴ地域では、Ⅰ地区の鶏冠井(74)、Ⅱ地区の上里(81)、今里(85)、友岡(97)があげられる。Ⅰ地区の鶏冠井は中期末に始まる集落で、後晩期にはこの地区の中核的な集落となっていたようである。また南山(68)出土の石棒は、Ⅱ次堆積の遺物であるが、この地付近に中期末の集落の存在を示唆するものといえる。Ⅱ地区の友岡は、前半を中心に営まれた集落で中葉に盛期を迎えている。上里、今里は中期末以降、中核的な集落となる可能性があり、今後の調査に期待したい。

後期 中期から集落が営まれている地区では、規模の拡大縮小はみられるものの後期前半も継続して集落の存在をたどることができる。新たにⅢ-Ⅱ地区の上鳥羽(44)で、前葉の集落が形成されている。Ⅰ-Ⅰ地区では、前葉に集落の並存状況がみられる。北から、修学院小学校(2)、北白川上終町(4)、北白川小倉町(6)、北白川別当町(7)、北白川追分町(9)、聖護院(13)があり、土器型式別にみてⅡ程度の集落の並存が推定できる。このうち、北白川追分町では配石8基と土器棺墓7基がみつかり、集落内の祭域・墓域と考えられる。Ⅳ-Ⅱ地区の中臣(49)では、前葉から中葉の墓域がみつかり、Ⅴ-Ⅱ地区の井ノ内(82)では住居跡、下海印寺(95)では配石がみつかり、いずれも前葉に属し、Ⅰ-Ⅰ地区同様、集落の並存状況が想定しうる。

こうした後期前半の状況に対して、後半の一乗寺K式期以降は遺跡数が減少する。Ⅰ-Ⅰ地区では、それまで北白川扇状地上にみられた集落はすがたを消し、かわって一乗寺向畑町(3)で集落が営まれ、後期末まで継続する。この遺跡以外に、この時期の集落と目されるのは、Ⅳ-Ⅱ地区の中臣(49)、Ⅴ-Ⅰ地区の石田(73)、鶏冠井(74)、Ⅴ-Ⅱ地区の^{はごま}俗(102)、宮脇(103)であるが、実態は不明瞭である。

晩期 初頭から前葉の遺跡は、実態の不明な点が多い。Ⅰ-Ⅰの地区では、後期末に集落がとだえ、再び営まれるようになるのは中葉以降である。初頭から前葉で集落といえる遺跡は、可能性のあるものも含めて、Ⅳ-Ⅱ地区の中臣(49)、Ⅴ-Ⅰ地区の鶏冠井(74)、Ⅴ-Ⅱ地区の芝本(99)や宮脇(103)である。

中葉以降は、遺跡数が増加する。集落と認定できる遺跡は、Ⅰ-Ⅰ地区では一乗寺向畑町(3)、北白川追分町(9)、Ⅲ-Ⅰ地区では内膳町(27)、高倉宮下層(31)、Ⅳ-Ⅰ地区では大

宅廃寺下層(46)、Ⅳ-2地区では中臣(49)、Ⅳ-3地区では寺界道(58)、Ⅴ-1地区では中野(67)、鶏冠井(74)、Ⅴ-2地区では今里(85)、馬場(98)、雲宮(100)である。土器棺墓がみついている遺跡の多いのは、この時期の特徴である。さらに後葉(船橋式)から末葉(長原式)の時期には、これらの遺跡以外にも小規模な遺跡が増加している。遺跡の実態がはっきりしないが、注目すべき現象であろう。

4 遺跡を結びつける関係

前節までの検討の結果をまとめると、現状の資料によれば少なくとも京都盆地には、早期2~3、前期~中期後半1~2、中期末以降は時期により変動があるが、4~8の集落がある一定の距離を保ちつつ、並存していたと推定することができよう。泉拓良氏は、本稿でⅠ-1地区とした比叡山西南麓における遺跡群のありようを検討し、ひとつの集落を構成している集団は日常的生活における生産と消費の基礎的単位であり、基本的にこの地区(小地域)を領域として移動を繰り返していたと考えている⁽⁸⁾。この地区では、後期前葉などいくつかの時期に複数の集落の併存がみられる。短期間の集落でも聖護院(13)のように石棒が出土しているので、季節的な利用地とは考えにくい。集落の分岐とみなすべき現象と想定するが、時期が限定される点を重視すべきであろう。

このようにみえてくると、少なくとも中期末以降の京都盆地には、複数の集落(集団)の並存がみられ、それが遺跡群を形成しているとみとめられるわけである。それではこうした集落は、どのような関係で結ばれていたのだろうか。このような問題に直接ふみこめる手がかりはきわめて少ないが、ここでは土器を取り上げ、考えてみたい。

土器型式圏と地域間関係 型式の分布圏との関係で考えてみよう。土器研究の現状では、京都盆地には通時的にみて同一の土器型式が分布しており、今回区分したような地域ごとに識別できるような土器型式の差異は、ほとんど見出してはいない。その点では、京都盆地全体が同一土器型式を保有する土器地域圏を構成しているといってもよい。しかし、この土器地域圏は京都盆地内で完結するわけではなく、大部分の時期を通じて大阪平野や滋賀県湖西地域といったより広い地域を包括する。同一土器型式を保有する集団は京都盆地の範囲を越えた少なくとも近畿中央部程度の広がりをもっていたと考えるべきだろう。同一土器型式内の小地域色がいかなる地理的範囲で識別できるかが集団間の関係をとらえるうえで課題となろう。

この点に関する検討は資料的制約もあって十分進んでいないが、晩期末長原式につい

て、京都盆地中央部を境に小地域色が存在するとする中村健二氏の指摘は重要であろう。⁽⁹⁾ 中村氏は、凸帯文深鉢のうち調整工程の違いで分けたⅡ類が、近江から京都盆地東半（Ⅰ～Ⅳ地域）に分布し、西半（Ⅴ地域）以西には分布しないという地域的な差を識別している。あとで述べる土器の胎土でもこの時期、Ⅴ地域とそれ以外では違いが生じており、集落間の結び付きという点で、2つのグループに分けることができそうである。同様な地域色の存在は、弥生中期以降の土器研究ではやくから指摘されており、⁽¹⁰⁾ こうした地域的まとまりがどこまで遡りうるのか、追究する必要がある。

土器型式の動態と地域間関係 土器型式の交替や推移といった現象はより広い地域における土器の変化と連動しており、通時的にみた場合、より東との関係が強かったり、逆に西との関係が強かったり、あるいは独自色が強いといった土器地域圏の変動がみとめられる。いま、土器量の増減も含めて内容が比較的よくわかっているⅠ-1地区における土器型式の動態と遺跡群の動きについてみてみよう。⁽¹¹⁾

この地域では、早期前半の押型文後半期に集落が出現するが、押型文前半期から後半期への土器の変化は、瀬戸内地方からの強い影響によるもので九州から近畿までが一体となるような土器地域圏の再編の結果である。前期に入ると北白川小倉町(6)を中心に集落が繁栄するが、前期末中期中頭には北白川追分町(9)に集落の中心が移動しかつ規模が縮小する。前期北白川下層式諸型式は近畿を中心に型式が推移しているのに対し、前期末中期中頭の大蔵山式・鷹島式の分布の中心は瀬戸内地方に移っており、これ以降中期後半までの土器地域圏の中心は瀬戸内地方にある。

これに対して、中期末北白川C式は東日本からの強い影響のもとに成立した型式であり、地域圏の大きな変化がみられる。この時期に、北白川追分町を中心に集落の繁栄がみとめられる。中期末に繁栄した集落は、後期初頭には一時的に衰退するが、後期前葉北白川上層式期には再び繁栄する。この時期には東日本からの影響と在地の伝統が複雑に組み合って型式が成立・推移している。後期前葉に繁栄した集落は、中葉一乗寺K式になると廃絶し、かわって一乗寺向畑町(3)に集落が移る。一乗寺K式は地域色の強まる時期であり、土器地域圏の変動期と想定している。

このように、土器型式の動態と集落の消長をみてくると、土器地域圏の変化と集落の廃絶や移動、遺物の出土量などに示される繁栄・衰退がある程度連動していることが想定される。個々の集落の移動・廃絶あるいは繁栄・衰退の過程をこれだけで説明できるとは思わないが、土器地域圏の変化をひきおこすような広域にわたる、ある種の社会的な変動が

個々の集落の存続にも深く関与していた可能性には注目する必要がある⁽¹²⁾。

土器の胎土と地域間関係 土器から地域間の関係を探る指標として最後に、土器の胎土を取り上げる⁽¹³⁾(表8)。胎土Aとしたものは胎土中に角閃石を多量に含み、暗褐色の色調で、一般に「生駒山西麓」産と考えられているものである⁽¹⁴⁾。

まず筆者が検討できたⅠ-Ⅰ地区を通時的にみてみると、胎土Aの構成比率は時期別に波がみられることが分かる。比率の高い時期として前期前半、後期前葉、晩期末があり、ほとんどみとめられない時期として、前期後葉、中期、晩期中葉～後葉の時期が指摘できる。とくに、前期初頭(羽烏下層Ⅱ式～北白川下層Ⅰ式)、後期前葉(北白川上層式2期)には4割を越える非常に高い比率を有する。ただし、比率の高いのは深鉢(有文、無文ともにあり)で、鉢・浅鉢にはほとんど含まれていないか1割以下である。

こうした土器の移動現象について、弥生土器のあり方を詳しく検討した都出比呂志氏は4つの類型に分けて説明している⁽¹⁵⁾。しかし、特定の器種の上に4割を越えるような高率の他地域産の土器が占めるような現象は弥生土器にはみとめられないようであり、縄文的な移動現象を示しているようである。それがどういう背景をもっておこなわれたのか、早急に解釈する前に、時期的地域的に比較できるデータを積み上げる必要があるだろう。いずれにしても、その比率の変動は中河内の集団との関係を示す指標として利用できよう。

胎土Aのしめる比率は直接的には中河内の集団との関係を示す指標であり、京都盆地内の集団間関係を示してはいない。しかし、盆地最奥部のⅠ-Ⅰ地区の集団が、中河内の集団と直接関係したと考えるよりも、京都盆地と大阪平野を結ぶ要衝の地に位置しているV地域の集団がなんらかの形で関係していたと考える方が自然であるとすれば、京都盆地内部の遺跡間で胎土Aの比率を比較検討することによって、京都盆地内部の集団間関係も間接的にはあるが、ある程度読み取ることもできるであろう。

現状ではデータが少なく、比較できる時期・地域ともに限られているが、後期前葉ではⅠ-Ⅰ地区、V-Ⅰ地区ともに胎土Aのしめる比率は高く、その比率の推移も連動しているとみてよいのではないだろうか。データを掲げていないが、Ⅰ-3地区の上賀茂(17)(北白川上層式2期)でも破片で比率をみたところ、4割以上の比率を占めている⁽¹⁶⁾。

これに対して、晩期後葉から末ではどうであろうか。Ⅰ-Ⅰ地区の北白川追分町では晩期末に1割5分程度、Ⅲ-Ⅰ地区の高倉宮下層(31)では晩期後葉から末の時期の土器のうち、胎土Aは全体の1割に満たず、Ⅳ-4地区の寺界道(58)ではほとんど含まれない。一方、V-Ⅰ地区では、3割5分以上という高い比率を示しており、地域的なばらつきをみと

遺跡を結びつける関係

表 8 遺跡別・時期別の土器の胎土

番号	遺 跡 名	地区	時期	土器型式	胎土 A	胎土非 A	備 考
6	北白川小倉町	I-1	前期	羽島下層+下層 I	7 (43.8)	9 (56.2)	深鉢口縁部
6	北白川小倉町	I-1	前期	北白川下層 II a+b	22 (18.3)	98 (91.7)	深鉢口縁部
6	北白川小倉町	I-1	前期	北白川下層 II c	2 (3.8)	50 (96.2)	深鉢口縁部
6	北白川小倉町	I-1	前期	北白川下層 II	2 (9.5)	19 (90.5)	鉢・浅鉢口縁部
6	北白川小倉町	I-1	前期	北白川下層 III	0 (0)	20 (100)	深鉢口縁部
9	北白川追分町	I-1	中期	船元 III ~ 里木 II	0 (0)	30 (100)	深鉢口縁部+胴部
9	北白川追分町	I-1	中期	北白川 C	1 (0.6)	156 (99.4)	深鉢口縁部
9	北白川追分町	I-1	中期	北白川 C	1 (2.1)	46 (97.9)	浅鉢口縁部
9	北白川追分町	I-1	後期	北白川上層 1	30 (20.4)	117 (79.6)	深鉢口縁部+底部
71	東 土 川	V-1	後期	北白川上層 1~2	胎土 A, 9 割以上		
6	北白川小倉町	I-1	後期	北白川上層 2	33 (48.5)	35 (51.5)	深鉢口縁部
6	北白川小倉町	I-1	後期	北白川上層 2	2 (9.1)	20 (90.9)	鉢・浅鉢口縁部
7	北白川別当町	I-1	後期	北白川上層 2	12 (40.0)	18 (60.0)	深鉢口縁部
7	北白川別当町	I-1	後期	北白川上層 2	0 (0)	6 (100)	鉢・浅鉢口縁部
78	森本 1 地点	V-1	後期	中津~上層 3	32 (45.1)	39 (54.9)	口縁部
78	森本 2 地点	V-1	後期	北白川上層 3	6 (11.8)	45 (88.2)	口縁部
11	京大教養部	I-1	後期	北白川上層 3	2 (25.0)	6 (75.0)	深鉢口縁部
9	北白川追分町	I-1	晩期	滋賀里 III b	0 (0)	11 (100)	深鉢口縁部
9	北白川追分町	I-1	晩期	滋賀里 IV	0 (0)	14 (100)	深鉢口縁部
9	北白川追分町	I-1	晩期	船橋~長原	6 (14.3)	36 (82.4)	深鉢口縁部
58	寺 界 道	IV-4	晩期	船 橋	胎土 A, 約60点中に 1 点		
74	鶏 冠 井	V-1	晩期	長 原	胎土 A, 約 6 割		
73	石 田	V-1	晩期	滋賀里 III b+長原	6 (50.0)	6 (50.0)	
70	東土川西	V-1	晩期	滋賀里 II ~ V	5 (35.7)	9 (64.3)	口縁部

数値は点数, 括弧内は百分率を表す。

めてもよさそうである。

中河内の集団との結びつきという観点からみれば, 盆地内部の I-1 地区と V-1 地区の「集団」間の関係は, 後期前葉には強かったのに対し, 晩期末の段階では III-1 地区, IV-3 地区も含めて, V-1 地区との関係は希薄になっていると予測することができそうである。この時期は近畿地方では稲作の導入に示される大きな変動期にあたっており, 中河内という近畿地方では時代の先端を進んでいた集団との関係, 新来の文化の受容過程で, それまで一体的なあり方を示してきた集団間で対応の仕方に違いが生じつつあったことを示唆している。

5 展 望

遺跡群のまとまりで示される集団間の関係を探るために, いくつかの手がかりをもとに検討をくわえてきた。最後に以上の結果をもとにして, 「遺跡群」という視点から縄文時代の集団組織の問題にいかに関与できるか, その見通しを述べて結びにかえたい。

今回設定した地区のいくつかでは継続的な集落経営がみられ、複数存在する場合は時期が限定されたり、その内容に差があったりする。このような時期を限定した集落の存在を分岐集落としてとらえてよいのであれば、同一地区の集落のまとまりは人口の増加減少のサイクルに合わせて、集団の分裂や統合がスムーズにおこないうるような血縁的に緊密な関係を保った「集団」の存在を示唆する。こうした「集団」の居住地たる集落は、林謙作氏のいう「ムラ」にあたるのだろう。林氏は、さらに東日本ではムラそのものに拠点となるものと出作り村や娘村など存続時期の短いムラがあり、それらが一体となって「複合型」の「村落」を構成しているとする。一方、西日本ではムラと村落の区分が明確ではなく、「規模の似通った小規模なムラが希薄な分布を示す」として、「連合型」の村落構成を想定している⁽¹⁷⁾。

今回の検討結果では、京都盆地に存在したムラそのものやその範囲、数はある程度とらえられる見通しを得ることができたと思う。しかし、同時に存在していた複数のムラがいかなるまとまり、すなわちいかなる社会的関係を保っていたかという点になると、とたんに不明瞭になってしまうのが実状である。存続時期などで多少の違いはあっても東日本で指摘されるような規模や内容が他と大きく異なったムラが存在するわけではない。周辺地域の遺跡群の検討も含めて、集落間の関係の吟味は十分とはとてもいえないが、林氏の指摘するように、小規模なムラが連続的に分布し規模や内容にはっきりとした階層性を示さないという西日本的な村落構成がその把握を困難にさせていると考えられる。ただし、東西の組織原理の差も想定されるので、東日本で設定できるような村落的なまとまりそのものが存在したかどうかがまず問題となろう。

こうした問題については、奈良県二上山産のサヌカイトや紀ノ川流域産の結晶片岩など、石器や石製品の原料に遠隔地から運ばれて来るものがあり、それらが石材の中で重要な位置を占めている点を重視したい。たとえば、I-1地区の北白川小倉町(6)や北白川追分町(9)では前期以降、石鏃の九割以上が直線距離で約 60 km 離れた二上山で産出されたとみられるサヌカイトで製作されており、もっとも重要な狩猟具である石鏃の材料を二上山から恒常的に入手しうる機構の存在が想定される。また同じく北白川追分町で出土している晩期の石棒・石刀類は、直線距離で約 80 km 離れた紀ノ川流域産の結晶片岩が使われている。

北白川縄文人がどのようにサヌカイトや結晶片岩を入手したか、その具体的な機構の解明は今後の課題であるが、盆地最奥に居住した北白川縄文人が、二上山周辺あるいは紀ノ

川流域の集団と直接結び付いて遠隔地物資の入手をおこなっていたとは考えにくい。その間には、物資の流通を円滑に進める中継地の存在が予測されるし、その背景に、いくつかのムラを束ねて遠隔地物資の入手を円滑かつ恒常的におこなったりムラ間の利害を調節するような共同組織、すなわち林氏のいう「村落」の存在を想定してもよいのではないか。

この点で、V-1地区の石田(73)で見つかったサヌカイト原石は示唆的である。⁽¹⁹⁾この原石は、後期末のものであり、11個が集積され貯蔵されていた。この遺跡の地理的位置をも考慮すれば、ここへ集積された石器原料は、この集落で消費されるためだけではなく、さらにここを中継地として盆地東部あるいは北部の集団へと再分配する性格をも、あわせもっていたのではないだろうか。京都盆地全体の集団が、いま述べたような遠隔地物資の入手・分配などをめぐって、緊密な社会的関係を結んでいたと想定したいのである。そうした結合の上に、土器型式の分布圏や特定の物資の流通圏で示されるような、さらに広域なネットワークが形成されていたのではないだろうか。

このようにみえてくると、土器型式の小地域色や胎土の検討からうかがえた晩期末におけるV地域とした盆地西半とそれ以外の東半の地域との関係の微妙なズレは、注目しうる現象であろう。この時期には小規模な遺跡が増加するという現象もおこっており、なんらかの社会的変動を予測させる。水稻農耕を受容してゆく過程の中で、盆地の東半と西半では、集団の対応の仕方に違いが生じていたことを示すものであり、これは盆地全体を束ねていた緊密かつ伝統的な社会的結合の解体を暗示している。

以上、いくつか推論を加えながら、京都盆地に存在した縄文時代の遺跡を群としてとらえる視点から検討を加えてきた。それは決して十分なものでなく、今後への出発点を示し得たに過ぎない。繰り返しになるが、遺跡を群としてとらえる視点とは、遺跡を有機的に結び付けることにほかならず、これは集団の領域や社会の構造を明らかにするための前提作業にほかならない。今後の課題をしるす。

資料的制約という大きな問題は存在するが、集落そのものや1集団を構成する集団の領域は、遺跡の分布状況、内容や時期的消長を綿密に辿ることである程度把握できる見通しを得ることができた。今後は時期的に並存する集落間の関係をどのように明らかにしてゆくのかについて、方法論的検討も含めて大きな課題になると思う。また今回試みたような検討をすでにおこなわれつつある他の地域の成果と比較検討することができれば、京都盆地でのあり方が京都盆地独自のものなのか、もっと広い地域と連動した現象なのか、具体的に明らかにしよう。

〔注〕

- (1) 京都府教育委員会『京都府遺跡地図』, 1972年, pp. 159-81。
- (2) 京都府教育委員会『京都府遺跡地図〔第2版〕』, 1989年, pp. 58-120。なお, 本稿で集計した遺跡数70は, 本遺跡地図の「埋蔵文化財包蔵地集計表」(p. 121)に記載された縄文時代遺跡数65より多い。これは, 遺跡地図では旧石器時代に含められている「有茎尖頭器」を本稿では縄文草創期?として扱ったためである。
- (3) 遺跡群研究の目的については, 武井則道「遺跡群研究序説(前)」『調査研究集録』第4冊, 1979年, pp. 1-50を参照。
- (4) 主なものに小林達雄「多摩ニュータウンの先住者——主として縄文時代のセトルメントシステムについて——」『月刊文化財』112号, 1973年, pp. 20-6, 石井 寛「縄文時代における集団移動と地域組織」『調査研究集録』第2冊, 1977年, pp. 1-41, 小林達雄ほか「(第1回シンポジウムの記録)縄文人の生活領域を探る」『研究論集』Ⅶ, 東京都埋蔵文化財センター, 1989年, pp. 81-236, 勅使河原彰「縄文時代の社会構成——八ヶ岳西南麓の縄文時代中期遺跡群の分析から——」『考古学雑誌』78-1・2, 1992年, pp. 1-45, 145-71。
- (5) 本稿で対象にした資料は, 「京都盆地縄文時代遺跡地名表」『先史時代の北白川』京都大学文学部博物館図録第4冊, 1989年, pp. 80-2に掲載した遺跡を基本にして, 若干の追加修正をおこなったものである。データ作成のために利用した報告書類は, 本稿では必要最小限のものを挙げるにとどめた。同書の「遺跡地名表参考文献」pp. 83-7を参照していただきたい。
- (6) 泉 拓良「縄文集落の地域的特質——近畿地方の事例研究——」『講座考古地理学』第4巻, 村落と開発, 1985年, 第8図。
- (7) 前掲注4小林文献。
- (8) 前掲注6文献および泉 拓良「縄文時代のムラ——近畿地方——」『縄文から弥生へ』, 1984年, pp. 107-19。
- (9) 中村健二「近江・山城の凸帯文後半期の土器について」『滋賀文化財だより』No. 144, 1990年, pp. 1-4。
- (10) 1960年代には, 第Ⅱ様式の土器について近江の影響の強い京都盆地の東部と弱い西部との地域色の存在が明らかにされている(佐原 眞・田辺昭三「鶏冠井遺跡」『東海道新幹線増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』, 1965年, pp. 182-4)。その後, 資料の増加とともにほかの時期でもほぼ同様の地域色が明らかになっており詳細な検討が加えられつつある(円勝寺発掘調査団「円勝寺の発掘調査」(上)『仏教芸術』82, 1971年, pp. 77-8, 都出比呂志「弥生時代」『向日市史』上巻, 1983年, pp. 89-98, 飛野博文「山城の弥生後期土器」『京都大学構内遺跡調査研究年報昭和56年度』, 1983年, pp. 67-77, 國下多美樹「近江系土器について」『京都府弥生土器集成』, 1989年, pp. 84-128)。
- (11) 千葉 豊・矢野健一「縄文土器の変遷」『先史時代の北白川』京都大学文学部博物館図録第4冊, 1991年, pp. 54-62。
- (12) 矢野健一「遺跡を群としてとらえる」『先史時代の北白川』京都大学文学部博物館図録第4冊, 1991年, pp. 68-71。
- (13) 文献から引用したデータの出典は, 次のとおりである。
 森本1地点——亀割均ほか「長岡宮跡第141次(7AN7H)地区～北辺官衙(南部), 森本遺跡～発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第29集, 1990年, pp. 14-6。
 森本2地点・久我西出町——亀割均ほか「長岡宮跡第143次(7AN6C)地区～北辺官衙(北部), 森本遺跡発掘調査概要」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第29集, 1990年, pp. 51-3。
 寺界道——南博史ほか『伊丹市口酒井遺跡——第11次発掘調査報告書——』, 1988年, p. 236。
 鶏冠井・東土川西——秋山浩三「河内からもち運ばれた土器——山城・乙訓出土の生駒西麓産土器——」『長岡京古文化論叢』, 1986年, pp. 386-9。
 石田——新庄良「縄文土器胎土中の砂礫分析の方法と展開」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第33集, 1992年, pp. 181-95。

- (14) 胎土の識別は、肉眼によりルーペを補助具として使用した。一般に「生駒西麓」産とみなされる胎土にも、含まれている鉱物・岩石の種類や量、大きさなどから、採取地の違いが想定されており（菅原正明編『東山遺跡』大阪府文化財調査報告書付論，pp. 19-72，1980年），肉眼に低倍率のルーペを補助具として利用した分析でも，細かな差異の識別が追求されつつある（前掲注13新庄文献）。このような分析によれば「生駒西麓」産としてくられる土器にも，生駒山西麓付近で製作されたものと，その前面に広がる沖積低地で製作されたものが含まれているようである。本稿では，胎土Aとしたものの細部の差は，問題にしていない。したがって胎土Aは，上述の両地域を含む「中河内」産の可能性が最も高いということになる。ただし，後で述べるように時期によってはきわめて高率を占めたり，晩期末の大型壺（浜崎一志・千葉豊「京都大学北部構内BD33区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報1987年度』，1990年，図21）のように持ち運びには適さないものもある。土器そのものの移動ばかりではなく，原料としての粘土や混和材の移動をも想定しておく必要があるのかもしれない。
- (15) 都出比呂志『日本農耕社会の成立過程』，1989年，pp. 298-320。
- (16) 京都大学文学部博物館所蔵資料による。
- (17) 林謙作「亀ヶ岡と遠賀川」『岩波講座日本考古学』5，文化と地域性，1986年，pp. 104-10。
- (18) 高橋美久二「縄文文化」『向日市史』上巻，1983年，pp. 43-4。